土佐日記

帰京　―　現代語訳　―

京に入っていったのでうれしい。家に着いて、門に入ると、月が明るいので、たいそうよく（屋敷の）様子が見える。聞いていたのにもまして、お話にならないくらい壊れいたんでいる。家に託しておいた（留守番の）人の心も、（家と同様に）すさんでいるのであったよ。（隣家とは）隔ての垣根はあるが、一つの屋敷のようであるので、（隣家から）望んで預かったのである。そうではあるが、ついでがあるたびに贈り物も絶えず受け取らせていた。今夜は、このようなざまだ（屋敷がひどく荒れている）と、（皆に）大声で言わせたりしない。実に（隣家が）薄情だと思われるが、（留守を預かってくれた）お礼はしようと思う。

ところで、池のようにくぼんで、水がたまっている所がある。そばに松もあった。（留守にしていた）五、六年のうちに、千年が過ぎてしまったのであろうか、一部分はなくなってしまっていた。新たに生えたのが交じっている。だいたいが、すっかり荒れてしまっているので、「ああ（ひどい）。」と人々は言う。思い出さないこととてなく、恋しく思われる中で、この家で生まれた女の子が、一緒に帰らないので、どんなに悲しいことか。同じ船で帰ってきた人も皆、子供が寄ってたかって大騒ぎしている。こうした中で、やはり悲しい思いに耐えきれずに、こっそりと気持ちを分かってくれている人と詠んだ歌、

生まれしも…（《この家で》生まれた女の子も帰ってこないのに、わが家に《新たに生えた》小松があるのを見るのは悲しいことよ。）

と言った。それでも飽き足りないのであろうか、さらに、このように（詠む）。

見し人の…（かつて見た人《亡くなった女の子》を松のように千年の寿命をもつものと見ることができたら、遠く《土佐の国で》悲しい別れをしたであろうか。いや、しなかっただろうに。）

忘れがたく、残念なことが多いけれど、書き尽くすことはできない。ともかく、早く（こんな日記は）破ってしまおう。